

Schontext

(いたわりのテキスト)

今回のエドウィナ・ホールは、schonen(ショーネン)いたわりのコレクションで、モード産業における生産プロセスとその状況をテーマにする。

現在、モード産業は急速なサイクルの中、より良質に、より革新的に、より効率的であることが、生産に携わっている人間、生産プロセス、そして商品にも強制されている。これは、経済という仕組みの中で、モード産業が置いていかれないようにするために、そうならざるを得ないからである。しかし、今回のコレクションでエドヴィナ・ホールは、その誇張した状況を否定し、「schonen(いたわる)」という概念を人々に突きつける。

”Schonen”は負担の軽減、不断の活動をやめ、あるいは物の消耗を減らすことを意味する。つまり、それは自分自身や他人、そして物やその周囲の環境に対する思いやりにあふれる扱いをすることである。エドヴィナ・ホールは”schonen”のギアでもって、自身を含むクリエイション部門や販売部門、そして環境のために、モード産業の向きを切り換えるのだ。”Schonen”はまた、注意深く、普段とは一味違った視点で身体やファッションを見るため、洋服やもの、そして自分の周囲ひいては社会に目を向けるということと同意義になるのである。金銭や利益を最優先させるのではなく、労力と制作過程が望ましい形でバランスがとれ、多少のもうけがあればいいのである。

毎週日曜日には、適度な時間をかけて、仕事着とは別の自身をいたわるための洋服が選り出される。週に一度、あるいは特別な機会にだけ着られる、お気に入りの衣服たちは、大切に扱われてきた。仕事がない日は、そのような祭日用の洋服を着ることで特別になる。このような場面では”schonen”は「働かない」、「休養する」、「自分自身を酷使しない」、「リラックスする」、「一緒にお祝いする」といったことになる。エドウィナ・ホールはこのような日曜日的なことをふまえ普段着をデザインしている。毎日schonenの振る舞いを思うままにするために。忙しい毎日を一時的にスローダウンし、その休息の瞬間が実際に生きるとき、schonenのファッションは、自分自身や他人、そして自分の周りのものに対して気持ちをかけることを思い出させてくれるだろう。ちょっとした時間をみつけ、一休みし、少し止まって、リラックスするのである。

コレクションは、家具を覆い、ソファやひじかけ椅子を大事に使うために使用される布やカバーに倣っている。つまり、そのような布は、日々の使用によって消耗することや、光や汚れから守り、また、すでに消耗している外見を包み、覆い隠す。エドウィナ・ホールは、これらの長方形の布を参考に、身体を外部の影響から守るコートやケープを発案した。布は、今回のインスピレーションの元になったものと同様、身体も包

み、覆うのである。“Schonen”の衣服は外からのダイレクトな影響を和らげ、そして身体の領域を誰にも見られずあるがままに振舞えるような、人間を保護するための皮膜を提供する。身体のために完璧でぴったり合う形ではなく、自由な空間を、いたわりの領域を享受できるということを大事にする。衣服が安全地帯であるということのも、デザインのコンセプトである。

エドウィナ・ホールは、今回のコレクションで、モード産業の極端な生産スピードに対して、いたわりの行動のリズムを仕掛ける。人々を消耗させるような発展を増大させるための過大な要求と、過剰な競争のシステムは、この“schonen”の衣服を着れば、その瞬間に、減退していくだろう。この衣服は、休息をとるという意識を生み出させ、経済中心社会に対するちょっとした抵抗でもある。“Schonen（いたわり）”の衣服は心地いいバランスそのものなのだ。

sabine winkler / translation hinako kasagi

「Schonen（ショーネン）」

ドイツ語で幅広く使われている言葉だが、文脈によって、‘大切にする’、‘傷めないように使う’、‘寛大に取り扱う’、‘保全する’などと和訳される。また「sich schonen」という再帰動詞は‘体を大事にする’ことを意味している。

一見古めかしい言葉だが、「Schonen」とは実は‘保全’という意味で、「サステイナビリティ（持続可能性）」を巡る議論においてもキーワードとなっている。

70年代であった子供の頃、洋服をばらして、生地をひっくり返して新たに縫い合わせたり、あるいはセーターをほどいて、その毛糸で別のものを編んだりした人はもう殆どいなかったと思うが、テキスタイルをまだ今より大事にする時代だった。末っ子だったのでお下がりばかりで、新品を買ってもらった時も、殆ど夏・冬のセールものだった。その代わりに手ごろで品揃いの豊富な生地屋さんがあって、祖母や近所のおばさんに「Dirndl（オーストリアの民族衣装）」、ワンピース、パンツ、コートや舞踏会のドレスまで仕立てたり、直したりしてもらえた。いいものを大切に扱うということから、日曜日や特別な日にしか着てはいけないコートなどもあった。母親が靴下や下着などの穴を丁寧にかがったし、パンティーストッキングを「ストッキングおばさん」のところに持って行って、直してもらった。

年配のおばさんたちのリビングではアンティーク家具のソファや椅子には白い保護カバー（Schonbezüge）が被せてあった。クリーニング店のない時代には洗えない素材が沢山あり、綿や麻のカバーは家具を埃や日光から保護しただけではなく、外しやすく、洗いやすかったので、定期的に煮沸して、干して、そしてきちんとアイロンをかければ、インテリアがより清潔で美しく見えたに違いない。

「Schonen」の語源も実は現代ドイツ語で「美しい」を表す「schön」と同じ。中高ドイツ語では、「優しい」、「丁寧」という意味でも使われたようである。

本体を守るための要素は家具のほかに、服の襟、カフス、エプロンなど沢山ある。服を汚れから守ることに加えて、美的な役割を果たす面もある肌着と少し似て、洗しやすい素材からできていて、衛生機能と装飾機能を両立している。

歴史の話題の中で、資源を特に大切にした社会として、江戸時代が挙げられることが多い。こういう江戸的な謙虚で畏敬な態度、「もったいない」で総括できる合理的な考え方は今日も日本の日常に目にすることは多々あると思う。しかし、こういう伝統的な思想とは対照的な「もったいない」の発想も存在する。リモコンにサララップ、電話器にレース付のカバー、便座にピンクのタオル地カバーなど。ホテルの宴会場で椅子に着させられる服も目を引く。一見「保護カバー」に見えるものは実は下のさほど高価でない本体のビニールカバーを隠すためにある。ここでは保護するという本来の意味が既に失われている。

物事を美しく見せる願望から、「Schonen（保護）」を目的としたものの美化は昔から進められてきた。今日になって、本来の必然性が薄れても、家具や洋服などを美化させる要素として数多く残っている。

dorothea gasztner